

琉球文学の中の「若松」伝説

池宮正治

琉球方言文学の中で「まつ（松）」「若松」「松金」「松寿」「松瑞」などの表記や訓みがあるが、正味は「まつ」である）とよばれる少年がしばしば登場する。もっとも古い『おもろさうし』をはじめ、戯曲の「組踊」、短詞の「琉歌」、はては家々の「家譜」の始祖伝説にまで入っている。その意味でまったく特異な、しかも重要な人物伝承と言える。本稿では、その「まつ（松）」という少年が琉球方言文学の各ジャンルにどのように入っているかを概略述べるとともに、その相貌の変化を考えたいと思う。

『おもろさうし』第二巻「中城越来のおもろ」二十四番のおもろに、

一 安谷屋の若松（安谷屋の若松）

あはれ 若松（あっぱれ 若松）

枝差ちへ（枝を差しのべて）

浦襲う若松（村をおおう若松）

又 肝あくみの若松（心待たれる若松）

とある。このおもろの行間に「くじに、むかしあかのこと申名人、或時安谷屋辺江罷通候折、童子ひとり、蕪の荷かたげ参候を、其蕪ひとつやらねと申たれば、則童子荷を卸、鎌にて蕪の皮をさり、四

ツにわり捧る。されば名をばいかにとありば、まつと答る。その時給り申おもろ也」とある。このおもろの来歴を説明したもので、おもろ全体としてはこうしたことは珍しいことであるが、七例ある短文注のうちの一つがこれである。「くじ」はつまり「故事」（古事）で、歴史上の物語・伝説、当時の人にとっては歴史上の事実である。そのおもろ歌唱の名人アカノコが中城間切の安谷屋を通りかかった折、かついでいた蕪を所望され、即座に皮をむき四ツに割り差し上げたところ、このおもろを唱って祝福したというものである。行間の短文注は、これだけだと「まつ」と言う少年の親切に感動し、そのお札にアカノコがおもろを贈ったことになる。ここには親切な心優しい若松、そして気転のきく少年像が浮んで来る。ではこの短文注がおもろとうまく適合するかと言えば、多少説明を要する。と言うのは『おもろさうし』巻二は一六一三年の成立であり、短文注は、一七一〇年の焼失再編の時に安仁屋本に付けられたもので、成立から短文注が付けられるまでに、約一世紀の時間的差が認められる。慎重な言い方をすると、短文注は近世のその時期の認識とすることになる。つまり短文注とおもろは切り離して理解すべきである。それではおもろは何をうたっているのであろうか。木質めと言

う人もあるが、松は実り木ではないし、また単に樹木をほめ上げるおもしろいので民俗学で言う木賛めではないだろうが、木を賛めることにより土地を賛めるおもしろにはなっていないよう。土地の人や事物を賛めて土地賛歌とするのは、多分に常套的手段である。安谷屋の対語「肝あぐみ」は、待ち望まれる、期待される意で、同じ巻の二十六、二十七番に「きもあぐみのもり」ともあり、安谷屋村の祭祀をする場所であった。そこに生えている「若松」（これも賛めるとば）が枝を差しのべて、村（うら）を守っている、と言うので、土地賛歌であり、若松と言う少年の話とは本来別のものであったと思われるのである。

一八九五（明治二十八）年頃の伝聞と思われる、田島利三郎の『語学材料』第十九に、「中城若松の頌歌」の項があり、「中城わかまつや あはれわかまつや えださき うらおそわかまつ」とあって、つづけて「陶氏即中城若松ノ子孫ノ系図ニアル由、其子孫タル陶氏祝嶺某イヘリト、当時祝嶺某トシク御側仕タリシ山内氏ノ物語ナリ」とある。『おもろさうし』は、当時王府と安仁屋おもしろ主取家に伝来した秘本で、祝嶺某も山内（盛蕙）も未見の物だったはずで、「あだにやの」が「中城」に変わっただけのおもろが、近代に至るまで伝承されていたと言ふことは、『おもろさうし』再編以前これから抜け出して家の伝承になっていたことを証している。では短文注の「童子まつ」が陶氏の若松になるのかと言うと、すぐさまそうとはならない。陶氏若松はその伝承の一つと言ふことになる。たとえば真境名安興の「組躍と能楽との考察」（『琉球戯曲集』⁽²⁾所収一九二九年）によると「尚氏亀山家の『元祖由来記』に拠ると

中古若松号ニ一開、安谷屋之城主也。有二男子。安谷屋親雲上、号ニ自保。』とあって、その三代目の春嶺安仁屋親雲上の二女は尚寧王の夫人となった安谷屋大按司志良礼であって、章氏佐久真家の元祖になって居る」とのべられている。章氏の家譜が現存せず同趣の伝承があるかどうか確認できないが、『氏集』⁽³⁾には章氏の過半が元祖を安仁屋親雲上正勝としていて、現に安仁屋を名宣る家もいくつあったことがわかる。とすれば若松は章氏の始祖でもあったのである。しかし章氏の場合、これらの資料から章氏がごどのような物語をもっていたのかわからない。

これに対して、さきの陶氏若松の場合は、組踊に仕組まれて実には雄弁である。組踊は周知のように一七一九年、中国から来琉した冊封使一行を歓待するために、玉城朝蕙によって初めて創られて上演された琉球方言による古典劇である。その初演の二番のうちの一つが、今日「執心鐘入」（一名中城若松）と言われるものである。この時の冊封副使徐葆光の『中山伝信録』には次のようにその物語が叙述されている。

中城県姑場村、農家陶姓、有兒名松寿、年十五歳、白皙端麗、至三首里、從レ師、一日行至三浦添、山徑中向レ昏黒、持ニ竹竿一、點レ地行、見レ燈求レ宿、乃ニ獵家、父出夜獵、止ニ女年十六、頗妖麗、留宿挑レ之、松寿坐睡不許、強擁之、松寿扞レ衣起、女羞且怒、持ニ獵具ニ欲レ殺、松寿、松寿走、女逐之、山曲有ニ萬寿寺、主持僧普徳頗有レ行、松寿奔入号救、四顧、無ニ隱処、僧伏ニ之大鐘内、令三徒守ニ鐘旁、女至、三僧戲勸逐之、女不レ得ニ松寿、仰哭如癡、出門去、僧啓レ鐘有レ声、女還奔入、

方欲^レ為^レ惡^ク、忽披^キ髮^ヲ改^メ形^ヲ入^ニ鐘^内ニ普徳與諸僧繞^リ鐘^ヲ咒^ス之^ヲ、女
自^レ鐘^倒垂^シ首^ヲ、出^テ見^ニ鬼^面、手^ニ一^又一^ノ擊^シ諸^僧、僧^咒不^レ
已^ニ、寺^外大^雷電^シ、女^化魔^走出^テ、不^レ知^ス三^所在^ニ、

同じく中城間切ではあるが、陶氏若松は姑場（現在久場）の農家の出身ということになっている。松寿は童名の「まつ（松）」の方音マチューやマツイーの漢字表記であろう。「白皙端麗」つまり色白で容姿の美しい少年であるばかりでなく、首里に至って師に従う、という物学びの少年である。後の少女の誘惑をかたくなに拒むくだりからも察せられるように、物学びと言えば儒教であったはずである。美少年というのは組踊「執心鐘入」にも生かされていて、女性が懸想しついに敗れて変身する重要なモチーフになっている。この「執心鐘入」も一部影響を受けている能の「道成寺」も、またそのもとになった『日本法華験記』『今昔物語』『元亨釈書』も、男は美貌すぐれた若い僧といったストイックな人物で、そのかぎりでは、若松と同一の線上にある。さきの「おもしろさうし」の短文注の若松に美男が加わり、利発さが学問をする形に上昇している、とも言える。

陶氏若松伝説は、その後一八〇〇年尚温王の冊封のために来琉した李鼎元の『使琉球記』にも出ている。鼎元が僧で道徳知識のすぐれた者がいるかと問うたのに対して、久米村の長史が答えたもので、「昔中城県姑場村に陶姓あり。先世は簪纓、中ごろは落ちて農を業とす。子有り、松瑞。性は穎悟美秀而文あり。五歳にして読書、目を過せば即ち誦を成す。父母之を愛し、乃ち儒を業とせんめんと、首里にて師に就かしむ。年十五、豊姿益々俊れ、婉として処子の如

し。（以下略）」（原漢文とあって、かつては身分ある家であったが落ちぶれて農家になったと説明されている。『中山伝信録』ではたんに「農家」となっていてこの辺の事情がわからないが、「執心鐘入」上演当時もつまり一六八九年に系図座設置された時も「陶姓」（陶氏）があったはずで、「氏集」では、陶自秀・照屋親雲上全憲を元祖とする、当山、具志堅、稲福、小那覇の各系がみられる。ただしこの陶自秀が陶松寿（松瑞）であるかどうか、家譜が現存しないのでわからない。とにかく架空の話ではなくまさしく故事（古事）だったのである。松瑞の性質は「穎悟美秀而文」につきる。「五歳にして読書」以下はその具体的な表現である。聡明で儒者にするために師に就かせている。しかし年十五で、豊姿は婉として処女のようであった、とそのままならぬ美しさをのべている。その後の女との葛藤は『伝信録』とおおむね似ているものの、結末は僧に咒伏された女が狸であったこと、松瑞は後に紫巾官（士分の最高位）になったとある点が異なる。ただし『使琉球記』に見られるこの種の物語が、多く組踊に出て来ることを思うと、これもまたこの時代の「執心鐘入」に対する「理解」であった可能性もある。

組踊を観るに際してあらかじめ梗概を漢文で書いた『故事集』を冊封使たちに示したことが知られている。しかしながら現在これを見ることができない⁽⁴⁾。先掲の真境名安興の論文の「自注」に、その一部が引用されている。

陶某年五十歳、初生^ニ一^児、父母愛情如^ニ異^宝一般、時見^ニ庭前有^ニ松^樹、鬱^々蒼^々、四時結^ニ春^因名^ニ某^児、曰^ニ松^瑞、漸^々長^成、生^得人^物嫵^織、面^非粉^而皤^白、唇^未脂^而凝^紅、……年

十二歳、父教_三他前_三到首里、役_レ師受_レ業……(下略)。

庭に生えていた松の木が鬱蒼として年中春のようだったので「松瑞」と名付けたとあって、これはおもしろの「わかまつ」とも縁を引くものである。この松瑞は、もちろん組踊では「若松」となっており、以下の物語全体も『伝信録』にきわめて近い。なお『伝信録』の該箇所も『故事集』からの写しであろう。

右の『故事集』は一八三八年のいわゆる戌の御冠船か、一八六六年の寅の御冠船かのいずれかのもと思われるが、だいたい同じ頃のものと思われるものに、次のようなものがある。

往昔中城間切久場村陶氏何某と申人、先祖は忠節拔群相勤、筋目も能人候処、子孫漸々致_三衰微、田舎江罷下り、渡世仕候。及_三壮年_一候迄男子生産無_レ之_二処、晩年男子生産、若松と名を付、明暮慈愛不_レ斜。(不明)若松拾式歳比首里に列登、師匠を求、読書学文させ、元より生質聡明、殊に容顔美敷、桃花之春之朝に紅錦之粧。秋之月をぞ斯程之姿……(下略)

全体は『故事集』に似ているが、ここでも「若松」とあることが注目される。おもしろの「あだにやのわかまつ」と結びついたように、元来「若松」という名であったものを、松寿、松瑞に書き改めたものであったことがわかる。一種の漢訳でもある。

では「若松」という童名があったかと言うと、それは見あたらない。たとえば琉歌では「若松」は本土語と同じく若々しい松のことであって、人名ではない。

年や秋すれて冬枯れになても 肝や若松の春のみどり
恵みある露に千代の色ふかく 染める若松の並だる美らさ

「若松」に相当すべきものは「松金」である。「金」は接尾敬称辞である。この松金と伝説上の人物の話が、琉歌やそれにとまらう物語によく出て来る。

思納岳のぼて押し下り見れば 恩納松金の手振り美らさ

この歌の下旬の「恩納松金の」は、古く「恩納女童の」であって、恩納村の乙女の踊りの手振りの美しさを賛めて土地賛歌としたものであったが、この村出身の奔放な生き方をした恩納ナベ伝説と結びついて、彼女の歌となり、恋人の手振りを歌った歌と解されるようになった。あるいは「恩納松金の」に変化しても、松の名所だった恩納の松を擬人的に表わしたもので、やはりその途中は土地賛めであったのかも知れない。⁽⁶⁾

恩納ナベの歌と伝えられるものに、他に、

恩納岳あがた里が生まれ島 森も押し除けてこがたなさな

というのがある。恩納岳の向うはいとしい彼の故里、それをさえぎっている森も押し除けてこちらに引き寄せたい、というもので、万葉的な力強い歌として知られている。この歌の、恩納岳の向うにいる恋人が、伝説では金武の松金といって、美男でしかも身分のある人であったが、首里に帰って思いをとげられなかったという。

「恩納岳のぼて」の歌とよく似た琉歌に、

百すちのはんたおさんしち見れば 西の松金が手振り美らさ

というのがある。「百すちのはんた」つまり恐しいほど峻しい断崖から下を見ると、「西の松金」の手振りの美しさよ、というものである。この「西の松金」は第二尚王統を開いた尚円王のことと一般に解説されている。もう一首、

西の松金がいちぎやみそめしやうち おちやむなしぶりや拜み
ぼしやの

西の松金が短い衣服をお召しになって過しておられる柔和なお姿を拜見したいものだ、というのが通釈である。この「西の松金」も尚円王とする。これを尚円王とすれば、これまでの美男の松金ではなく、百姓から身を起して国王となった点では、賢利発な松金の系統を引き継いでいるものと言えよう。だが「西の松金」がはたして尚円王を意味していると考えてよいかどうか、中原幸吉の『琉歌物語』⁽⁸⁾によると、

仲村柄マカが七ひちち布や 西の松金のどんしゆばかま

とあり、やはり尚円王とはするものの、ラヴロマンス⁽⁹⁾になっていゝる。伊江島の仲村柄のマカト(マカ)と恋仲になり、紫菜の採れる島の北岸の荒磯で逢う瀬を楽しんでた。ある日伊平屋の松金を何時もの如く約束の場所で待つうちに、高波にさらわれて死んでしまった。そこで誰言うとなく、

上原の紫菜や採るものやあらん 仲村柄マカト波にもまぢ

と歌ったという。上原の紫菜は採るものではない、仲村柄マカトを波にさらわれてしまって、の意。もちろんこの二首とも琉歌集に収められていない民間の物語歌であるが、もはや「西の松金」が尚円である必要はあるまい。伊平屋島からわざわざ密やかな恋をしに来る必然もないわけである。

賢く美しい少年(青年)若松(松寿、松瑞、松金)の話は、章氏や陶氏の始祖伝説になり実在を信じられて中城村安谷屋には中城若松の墓もある。しかし恩納ナベの恋人とされる松金や尚円王に擬せ

られている西の松金などいずれも伝説に引きつけられ、美貌や賢さを強調されて引きつがれている。いわゆる総領の甚六を「ソーイラ一松」(賢い立派な松)というのも、若松伝説の遠い記憶の名残りであろう。これら伝説の背後に美貌と才能を兼ね備えた理想の少年若松の物語が流布していたものと思われる。

注(1) 琉球大学付属図書館伊波普猷文庫蔵。筆写本。

(2) 『伊波普猷全集』第三巻(一九七四年、平凡社)にも収められている。

(3) 一八九四(光緒二十)年王府の旧系図座筆者足であった屋嘉比里之子と多和田筑登之によって編集されたもの。那覇市史編集室より一九七六年那覇市史資料篇第一巻五の別冊として刊行されている。

(4) 東京の尚家資料の中に二、三の『故事集』があることがわかっているが、公開されていない。

(5) 琉球大学付属図書館宮内文庫所蔵の『文書集』(筆写本)に収められている。拙著『沖縄芸能文学論』(一九八二年、光文堂企画出版部)に翻字して全文収めてある(『執心鐘入』研究資料)。

(6) 拙論『恩納岳登て』の歌をめぐって」参照。拙著『琉球文学論』(一九七六年、沖縄タイムス社)

(7) たとえば島袋盛敏の『琉歌大観』(一九六四年、沖縄タイムス社)もそうになっている。

(8) 一九五七年刊。一二五頁「紫菜ローマンス」参照。ただしこれは『沖縄県国頭郡志』(一九一九年)の「伊江島仲村渠マカ

ト遺念火」(三二一―三二二頁)によっている。

(9) 注(8)の前掲書を受けて嘉味田宗栄も『琉球文学発想論』の中で「紫菜ローマンスと水」(二六四頁)の一項目を設けて論じている。論旨はかならずしも本稿とかかわらないので触れなかったが、問題は「紫菜」である。三者とも何ら説明がない。関根真隆の『奈良朝食生活の研究』によると、「紫菜」は「むらさきのり」と訓み、沖縄あたりのそれはアルバアマノリにあたるという。

(いけみや まさはる・琉球大学)

新刊紹介

演者と観客―生活の中の遊び

大林 太良 責任編集

本書は、「日本民俗文化大系」の第七巻にあたり、民俗社会の中の「演者と観客」を、口承文芸及び民俗芸能の両面から多角的に論じたものである。全七章のうち、大林太良氏の序章「口承文芸と民俗芸能」は総論にあたり、口承文芸と民俗芸能の共通性、それぞれの日本史における転換点、比較の視点の重要性を説く。

第四章「口承文芸の世界」では、荒木博之氏が「民間文芸の担い手」を執筆し、従来論じられてきた日本の昔話の特質について言及し、その根本には、中世の唱導者の存在を考えなくてはならないことを指摘している。同章には、大林氏の「口承文芸の分類」、小澤俊夫氏の「日本昔話の構造」、榎谷明氏の「ことばの民俗」の諸論がある。第六章「比較の視点」では、伊藤清司氏が「口承文芸の比較」の中で、日本と東南アジアの「勝々山」の詳細な比較研究を試みている。総じて、昔話の領域では、比較研究と構造分析を中心として日本の昔話の本質を究明し、新たな問題の提起がなされているといえよう。

月報には、大林・白田甚五郎・川口久雄の三氏による「口承文芸にみる民俗世界―日本と中国の比較をめぐって―」の座談会記録が収められている。

(大島廣志)

(四、五〇〇円 小学館)